

臨床検査技師のための 血算の診かた

岡田 定(著)

阪医大附属病院中央検査部技師長

池本敏行

検査技師が出合って良かったと思える一冊

本書の書評を書くにあたり、評者は『臨床検査技師のための血算の診かた』というタイトルに興味を抱きました。なぜかという、臨床検査技師(以下、検査技師とします)であれば、誰もが口にするのをためらってしまう、“診断”の“診”という文字が使われていたからです。まず、タイトルに惹かれて読み進めました。読み終えた今、期待以上の本であったと感じています。

この本は、著者が医師向けに書かれた『誰も教えてくれなかった血算の読み方・考え方』(医学書院、2011年)の姉妹本ですが、血算データを病態診断につなげていくというスタイルは同じです。症例数は医師向けの本よりは少ない35症例ですが、血液検査に携わる検査技師が遭遇するであろう血液疾患はほぼ網羅されています。血算データから病態診断までがQ & A方式で導かれており、血液検査に携わる検査技師の指導書として、また自己学習書としてぴったりな本です。検査技師は1日に数百という検体を扱うので、血算の時系列を全て確認することは困難ですが、この本では「血算を時系列で診る」という医師の視点を学ぶことができます。評者が検査技師になった頃は紙カルテだったので、患者さんの状態や投薬情報などを得ることは大変なことで、同じ検査室で測定している他の検査結果さえすぐに知ることが難しい時代でした。今は電子化されているので、検査技師でも、患者情報も血算の時系列も簡単に見ることができます。そういう意味からも、この本は時代にマッチしています。

“診断”を付けられるのは医師だけなので、検査技師は血算やその他の検査から病名を推測でき

ても病名をはっきりと口にすることはしません。しかしこの本では、検査結果から考えられる病名を積極的に医師へ伝えることの大切さやその病名を推測するに至った根拠、医師への伝え方までもが書かれています。そして医師や検査技師が重要な所見を見落とすとうなるかも説明されています。全体を通して、検査技師が患者のために積極的に診療に関わることの必要性を説き、チーム医療に積極的に参加するよう背中を押して下さっています。これは長年、著者が血液内科医として検査技師と接してこられ、検査技師の気質や技師が何をできるかをよく理解されているからに他なりません。

また、この本は検査技師にとって大変ありがたい内容となっています。血液検査に携わる検査技師は患者との接点が少なく、血算データの向うにいる患者さんの姿が見え難いものです。この本には診断後の治療経過や著者の臨床経験がコラムに書かれており、コラムを読むと著者と患者さんとやりとりが目に浮かび、いつの間にか診療の現場にいるような気になります。

書評を書くまでの間に、若手の検査技師が何度か血液検査結果の質問に来ましたが、この本に習って答えてみました。とても読みやすく血液検査に携わる検査技師が出合って良かったと思える一冊です。



●B5/頁184/2017年
定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-260-02879-0]
医学書院 刊